遙かなり南冥の天国と地獄

井出筆市
東中野一丁目

私が終戦を知らされたのは一九四五年八月十六日で、場所は旧蘭印（現インドネシア）東端の、かつて海のシルクロード時代に香料の島々として欧州人を魅了したモルッカ群島中最大のハルマヘラ島の山村でした。その日も敵機は来ましたが、空爆の代わりに多数の紙片が舞い降りました。それには「日本降伏」の意味が、和文とインドネシア語で刷られていました。今思うに、これがモロタイ島にあった地獄行きの切符でした。

天国と地獄への旅は、一九四三年十月、旧関東州大連で始まりました。当時海運会社員であった私は職業がら英語学院に通っていました。当時は太平洋戦争に突入していたので英語排斥時代でしたが、私は「戦争に勝っても負けても英語は絶対必要」との信念で、英会話を身につけるため日系米人の老夫人宅に出入りしていたため、憲兵隊に尾行されていました。ある日、件（くだん）の老夫人宅で一人の私服憲兵から、「君は近く関東軍に召集されソ満国境行きだが、英語を生かして憲兵隊通訳で南方に行かないか。目的地はコロムボだ」との誘いがありました。当時としては「南方に雄飛」ということで従軍を決意しました。二四歳でした。

そして十一月、大連から当時の新京憲兵隊本部へ。そこで憲兵に対する英会話指導をかねた出発待機の三か月を過ごした後、一九四四年二月、凍てつく新京を背に、南満州、朝鮮半島を南下し、釜山、下関を経て、門司から輸送船「扶桑丸」に乗船し、一路南十字星の輝く南方へ。胸中は夢と希望で一杯でした。しかし、当時既にテニアン、大宮島、キスカ、アッツ、インパールで敗北となり、当初の目的地コロムボ行きは予定変更となり、マニラから舳先（へさき）を東に向けました。航海中は、他の輸送船団が敵潜水艦の攻撃で次々と海底に沈んだとの悲報ばかりでした。私達の船は幸いにも攻撃を免れ、無事ハルマヘラ島ワシレ湾に錨を降ろしました。そして私の属する憲兵隊は、当時の第二方面軍の管轄下に編入されました。上陸地では折あしく雨期で、ジャングルに張った幕舎では、雨水を呑むため下痢患者の続出でした。任地決定を待つここで、私達が口にしたのは「俺が行

く先豪州と決めたよ、しばし仮寝のハルマヘラよ」でした。

やがて私の任地は、オランダのバタビア（現ジャカルタ）に移るまでの政庁所在地であったテルナテ島になりました。小さな島ですが、かつて植民地争奪時代に、スペイン、ポルトガル、英国、そしてオランダが攻防を繰り返した地だけに、透き通った碧（あお）い海、白い砂浜に緑の樹々、数々の果物、絵のような花や鳥、赤煉瓦に白壁の民家、山の中腹にお伽ばなしのようなサルタン宮等、全くこの世の天国でした。ここに赴任した私の急務は、英語に代わってインドネシア語を直ちに身につけることでした。そのために隊長命で現地人宅に同居し、毎日隊での朝礼後は、ターザンのごとくパンツだけの裸に番刀を帯び、裸足で原住民と接し、標準語の他に現地語も身につけました。しかし、この天国生活も長続きせず、ビアクを基地とするまでに反撃して来た米機の空爆で破壊されて、山中に逃避するという羽目となりました。このような情況下、私はハルマヘラ本島の憲兵隊本部に呼び戻され、敵の空爆による住民の逃亡を防止する宣撫工作の任に就きました。

当時ハルマヘラには、使役のため台湾人及びインドネシア人兵補、英軍（インド人部隊）及びオランダ軍捕虜の他に、ジャワ島の囚人が送り込まれており、異なった言葉が飛び交い、さながら国際島の感でした。しかし、制空、制海権を失ったため、日本からの食糧は途絶え、ジャングルを開拓してつくった甘藷が主食で、毒草以外の草も喉を通りました。捕虜や兵補は栄養失調で病弱者続出でした。特に哀れだったのはインド兵でした。背が高く体格が良いはずの彼らは「骨に皮が巻き付いている」という様でした。あまりのことに私は悪事は承知で部隊からコーヒー、砂糖、唐辛子を持ち出して彼らに与えました。このことが後日収容所で「地獄に仏」となりました。このような情況下では兵補が非常用食糧を盗むことが続発し、その罰としては、筆舌では尽くせぬ地獄絵巻が繰り返されました。

また、戦況不利となるに伴い、オランダ軍捕虜（ミナハサ人部隊）が山中に逃亡するようになりました。私にとって、ジャングルで裸同様で毒槍を持つ山岳原住民と接触し、逃亡捕虜を発見し説得するのは非常に危険でした。しかし、原住民と行動を共にし、木立とニッパ椰子で瞬（またたく）く間に雨露を凌（しの）ぐ小屋を建て、木をすり合わせて火をつける太古の生活も経験しました。宣撫工作のため、村から村からへと熱帯雨林の踏破を繰り返しているうちに、終戦のビラを読むに至りました。

本部に帰隊した後、一九四五年九月に連合軍側がハルマヘラに上陸し、兵器の引き渡し日となりました。憲兵隊の策略で私は歩兵部隊付き通訳を演じていましたが、憲兵隊の通訳を演じていた歩兵隊通訳が泥を吐いたため、私は直ちに戦犯容疑者として連合軍の駆逐艦に拉致されました。連合軍が陸上で戦犯狩りをやっていた五日間を駆逐艦の船倉で過ごした後、上陸用ラ

ンチに乗せられ暗夜の海に出ました。やがて想像もつかぬ程の電光に輝く港に着きました。それが私にとっての地獄、つまり戦犯収容所モロタイ島であったのです。

当時東部蘭印は豪州軍（英軍）の管轄下にありました。収容所に着くと容疑の程度による班別の分類が行われました。班はA、B、C、Dとなっており、A、Bは一般捕虜で、ボルネオや旧日本南洋委任統治地区からの兵士でした。Cは今後の取り調べによって再分類される者、Dは戦犯ということでした。豪州軍将校が私をCにするかDにするかの審議中に、かつて私が情けをかけたインド軍捕虜の軍医大尉が私を見て、「ミスター井出はとても親切な人だ」との一言で私はCに編入され一命をとりとめることになりました。その時驚いたのは、捕虜時代に骨と皮であったインド人軍医が、別人のように丸々と太っていたことです。

一つのテントは八名制で、私に与えられたテントにはセレベスから送り込まれた別部隊の将校が古参囚として七名いました。この先どうなるのかと一睡もせずに夜が明け、午前六時バケツを持って炊事場に行き、八名分のエサをもらって来ることも古参囚から教えられました。収容所は約三メートル高さのバリケードで囲まれ、所々に監視塔があり、夜でも昼を欺く照明でテントを浮き彫りにしていました。CとDのテント群はバリケードが二重でした。七時、朝の点呼に集まった時驚いたのは、かつてハルマヘラで捕虜や兵補を掌握していた顔見知りの将校連中がいたことです。この種の将校の多くは予備役で召集された初老人で、彼らは連日の取り調べと重労働で弱り果て、点呼が終わるまで立っているのがやっとでした。点呼が終わる頃、近辺の連合軍部隊からトラックが来て我々を連れて行き、夕方五時頃までの重労働の始まりという日課でした。夕方六時頃送り返されてから七時の夜の点呼までは、まるで古綿のごとくテント内でぶっ倒れるのが常でした。

夜の点呼時に、一人二本のタバコが与えられましたが、件（くだん）の老将校連は、前の者の肩やバンドに摑（つかま）りノロノロと歩くのが精一杯でした。それでもタバコを受け取らぬとビンタを取られるので仕方なく配給机に行き、最敬礼でタバコを受け取り、それぞれのテントに消えて行く後ろ姿は涙なしでは見られませんでした。彼ら老将校は、終戦時予備役召集兵と称して二等兵、一等兵の肩章を着けていましたが、日本の敗戦と同時に中国側に寝返った台湾人兵補の告げ口で収容所入りとなった人達でした。収容所では、週に二回位野戦法廷で死刑の判決を受けた将校の処刑が報ぜられ、その夜は収容所の片隅で、戦友が亡き友の遺品を机上に並べ、我々は焼香をして冥福を祈りました。

重労働の最たるものは石炭船の荷役だったでしょう。朝八時から夕方五時まで石炭の粉末濛々たる船倉に降ろされ、間断なく降りて来る網袋に素早く石炭を満杯にする作業で、休息はな

く水だけの一日でした。尾籠な話ですが、作業中の排便は、小は作業しながらそのままで、大は船倉の片隅で用足しです。夕方収容所に戻った時には、顔は真っ黒で、豪州兵の守衛が、「お前は誰だ」と誰何する有り様でした。そんな日は夕食も喉を越さぬ程で、とにかく横になることでした。

そんな日々の繰り返しで一九四六年となり、入所後約四か月で取り調べの順番が来て豪州軍取調官の前に立たされました。「旧連合軍捕虜の取り扱いと処罰」に関する尋問に「知らぬ存ぜぬ」の一点張りの結果、灼熱の太陽の下で約十五キロの石を頭上高く持ち上げた姿勢で、暗くなるまで立たされる日々が続きました。手が下がると棍棒で尻を叩かれ、水なしのため汗も出ぬ有り様でした。暗くなってテントに這い着くと、古参囚が、「君、まだ生きていたのか」と水を呑ませてくれました。

尋問と体罰を繰り返している日々が流れ、一九四六年四月に豪州に敗退していたオランダ軍が蘇生し、己が植民地蘭印に戻ってきたので、収容所は豪州軍からオランダ軍に移管されました。豪州軍と異なり、オランダの将兵はさすがに紳士でした。取り調べも理路整然でした。もちろん捕虜となっていた元オランダ兵の妻子の前に立たされ、首実験もされました。「私達の夫はどこにいるのか」と泣きつかれましたが、「私は本隊を離れ、ジャングルにいたので全然知らぬ」の一点張りでした。やがてオランダ人将兵は、政庁のあるジャワ島に引き揚げ、収容所は当時オランダ軍であったインドネシア部隊の管理下になりました。

次々とたらい回しの末、「厄介者に無駄飯は勿体ない」となったのでしょうか、六月上旬、私達C班の者は、ハルマヘラの残留兵を乗せた最終船に乗せられました。何時間にもわたる容疑の再チェックの後に、船はモロタイを離れました。船内では膝を立てて座るのが精一杯の混雑でしたが、生きて祖国の土が踏めることで感無量でした。約二週間の航海後、忘れもせぬ一九四六年六月二一日、和歌山県田辺港に上陸し、頭のてっぺんから足の先までDDTの洗礼を受けた後、出生地愛媛県今治市に向け窓硝子の無い復員列車に乗りました。そして一九三九年の大連行き以来八年振りに父母の待つ故郷に辿り着きました。復員後も人生の曲折多々ありましたが、終戦後四七年目の今日、東京の空の下で齢を重ねていることを不思議と思いながら、モロタイで処刑された戦友将兵の方々の冥福を祈っております。